

研究課題 (テーマ)		がんサバイバーに対する筆記療法を活用した看護介入モデルの妥当性の検証	
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部	助教	福村 寛子
分担者	看護学部	教授	片田 裕子
研究結果の概要			
<p>日本人のがん罹患率はおよそ2人に1人と言われ、がん医療の進歩によって長期に生存しているがんサバイバーが増加している。がんサバイバーの増加はニーズの多様化と複雑さを招き、相談対応の困難なケースが増えていることが報告され、支援体制の拡充や支援者の資質の向上が施策に盛り込まれている。</p> <p>そこで、本研究は新たながんサバイバーの支援方法として筆記療法を活用した看護支援プログラムの開発を目的とした。</p> <p>本研究は van Maijel ら (2004) による「根拠に基づく看護介入を開発するモデル」に準じた方法で実施した。</p> <p>第1段階として「がんサバイバー」「がんサバイバーシップケア」に関する研究を分析対象とし、がんサバイバーの抱える問題とニーズを分析した。がんサバイバーの抱える問題は年齢、がん種、がんサバイバーの時期により異なり、また、医療者の介入が希薄になる時期に支援のニーズがあることが示唆された。さらに、筆記療法および書くことを介入に用いた研究から既存の実践の内容を分析した。国内文献は医中誌 Web、CiNii、J-STAGE を用い、海外文献は PubMed を用い抽出し、介入の効果はどれだけ持続するのか、どの時期に介入することが効果的なのか、時期によって効果的な介入方法に違いがあるのか検討した。</p> <p>第2段階として、第1段階で分析したがんサバイバーが抱える問題およびニーズと、既存の実践内容を構造化したものを統合し、看護介入モデルを試作に取り組んだ。</p> <p>第3段階として試作した看護介入モデルに対し看護者は介入の実行性をどのように判断するかを調査予定である。</p>			
今後の展開			
<p>今後は試作した看護介入モデルの妥当性の検討のためパイロットテストとしてケーススタディを行う。さらに、介入に対する対象者の体験、介入の結果、どのような効果が体験されているかあるいは観察されているか、看護者は介入を実行する可能性をどのように判断しているかについて質的研究により評価していく。</p>			